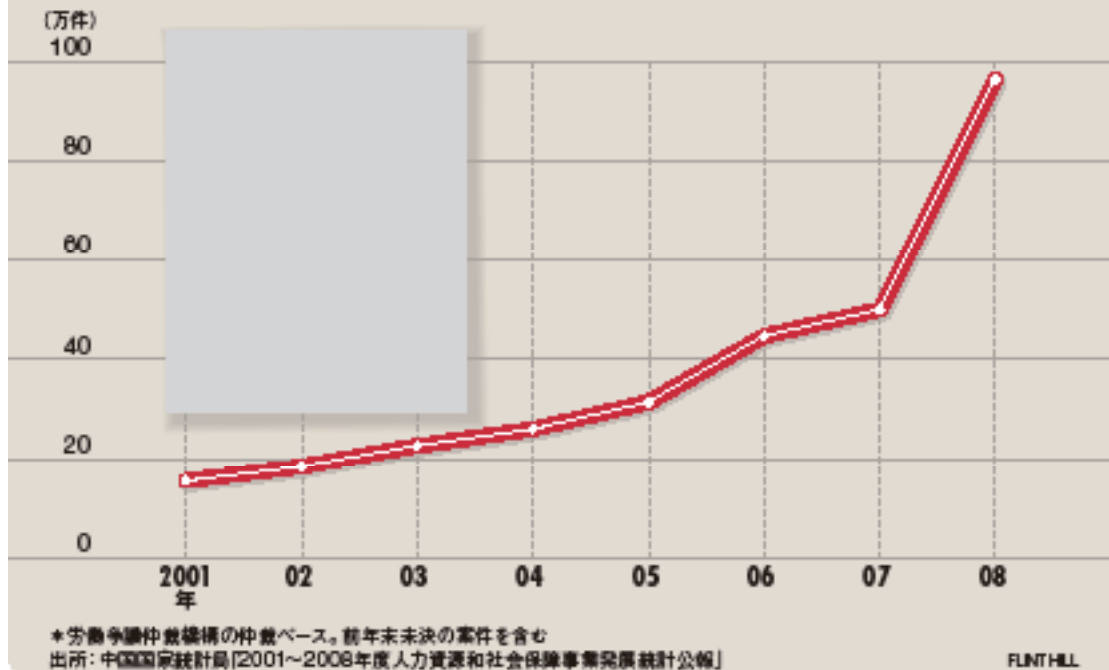


## 労使関係の緊迫化も毛沢東時代の郷愁を増長

中国の労働争議件数の推移



# 建国六〇周年を機に毛沢東が再び中国で礼賛され始めた

還暦を迎えた中国は複雑な様態を呈している。政治を含む抜本的改革の必要性が引き続き強調される一方、毛沢東時代を肯定し、毛沢東路線に回帰すべきだとの声も上がっている。

毛沢東路線への回帰という点、まさかと思われるかもしれない。しかし、部分的にせよ、毛沢東路線の否定を起点に改革路線が始まって三〇年たった今、毛沢東の亡霊が再び中国の上空でさまようようになってきているのは事実である。

一〇月一日の建国六〇周年記念祝典前後で起きたことを見るだけでも、その兆しは明らかだ。つい最近まで、建国後の歴史は改革路線が導入された一九七九年を境に二つの時期に分けて論じられてきた。改革路線導入を契機に中国が階級闘争と計画経済に象徴される毛沢東時代と決別し、新たな時代を迎えたという事実を勘案すれば、当然の分け方であった。

しかし、建国六〇周年を祝う過程では、過去六〇年を一貫して見る動きが顕在化した。中国が改革以降、高成長を実現できたのはあくまでも毛沢東時代に成長の基盤が築かれたからだという。しかも、このような主張を展開しているの

日本総合研究所  
理事

**呉 軍華**

Wu Junhua

は、毛沢東原理主義者だけではない。改革論者と呼ばれていた一部の学者も含め賛同する人が増えてきた。

このような流れを反映するかのようには、祝典直前の九月半ば過ぎに「毛沢東思想万歳」のプラカードを担いだマスメームが急ぎよ編成され、本番のパレードに加わった。

**現** 時点では、本当に毛沢東時代に戻り、しかも戻れると信じている人はごく少数だろう。

しかし、改革路線の下で、中国が高成長と繁栄を遂げたにもかかわらず、毛沢東路線を礼賛する声がかつて台頭したことはやはり要注意だ。確率としてはなお小さいものの、毛沢東路線の抜本的清算を躊躇する限り、中国が毛沢東路線に戻るリスクは消えないからである。

毛沢東が再び礼賛されるのは、成長の成果をあくまでも官中心に分配する官製資本主義的改革の進展に伴って、社会的対立が先鋭化したためだ。したがって、民衆の不満を利用し政権を狙う「第二の毛沢東」の出現を防ぐためにも、中国は官製資本主義的改革を改め、一日も早く政治を含む抜本的改革、民主化に踏み切るべきといえよう。